

博物館研究紀要に寄せて

肥田路美

当館の研究紀要は博物館開設の翌年度に創刊しました。初代館長の高橋栄一先生が協議員会の席上、Bulletinの刊行と収蔵資料の電子データベースの構築・拡充が必須であると力説されたのを末席でうかがってから四半世紀、このたびで第25号を数えます。創刊以来体裁は変わりませんが、美術作品や考古資料について論ずる本誌の性格に鑑み、前号からカラー印刷に切り替えて面目を一新しました。また、第19号以降は早稲田大学レポジトリでも閲覧できます。

創刊号には、三名の助手それぞれの研究成果など五篇の論文が掲載されました。なかでも巻頭の二篇は、開館当時から現在まで博物館一階ホールに常設展示されている《執金剛神》に関するものです。このブロンズ像は、当館の所蔵資料のうちで最も多くの来館者に鑑賞されてきた一点と言って間違いなく、この作品に接したのをきっかけに美術史研究の面白さに目覚めたという学生さんも見かけます。しかし、明治時代の日本を代表する鑄造家岡崎雪聲の手になり、明治26年のシカゴ万博に出品されたのち大隈重信邸の玄関に飾られていたという来歴や、特徴的な造形の近代史上の意味、東京大空襲で大破したまま長年忘却されていたのを1995年に大規模に修復した、その復元の実際などは、この二篇によって初めて知ることができたのでした。館蔵資料に即して、それに関する記録や調査報告、意味や位置づけを考究した成果を公表する、という博物館の研究紀要の本旨を体現するものですが、執筆者お二人とも先ごろ相次いで早世されたことが惜しまれます。

以来、論文、研究資料あるいは研究ノートや資料紹介、シンポジウム報告（これらのカテゴリー分けは時期によって揺れがありますが）という形で、当館の研究活動の成果を毎年度示してきました。これまで、協議員の先生方をはじめ学内外の研究者、連携する専門家など幅広い執筆者を得ていますが、特に助手と主任研究員は毎号への投稿がほぼ義務とされており、各人本来の研究テーマの論文や、それとは必ずしも連続しない館蔵資料の調査研究報告を寄せています。投稿原稿は、当館協議員二名（今号では館長・副館長と紀要編集委員会委員の教員）による査読をおこなっており、査読所見書は後日の点検評価に備えて保管しています。

2023年度も、本誌の活動報告にある通り、三つの企画展と九つのコレクション展を開催したほか、本庄早稲田の杜ミュージアムでの「會津八一と瓦の蒐集」展に協力するなど、充実した展覧会活動をおこないました。また、館蔵資料調査も各分野で鋭意進められ、例えば筆者も参加した森靖氏寄贈三十三観音応驗身像調査では、学内外の多くの専門家が参画し、元来の所蔵者と判明した西会津の古刹での調査も併せて実現して一群の仏像の全容と歴史的意義が明らかになりました。こうした成果も追って本誌で発表していく所存です。引き続き本館の活動へのご指導、ご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

